甲州文化再見

第二回 林 徐如林 安定的な生活基盤

"FŪ" "RIN" "KA" "ZAN"

来年一月からのNHK大河ドラマ「風林火山」の放映は、山梨の魅力を全国に発信し、本県のイメージをさらに高める絶好の機会です。県では、大河ドラマの放映にあわせ、官民協働の集客イベント「甲斐の国　風林火山博」の開催などさまざまな取り組みを行っていきます。
この機会に皆さんも郷土山梨をもう一度見つめ直してみませんか。英雄・武田信玄の時代の文化を「風」「林」「火」「山」の四回シリーズで紹介しています。

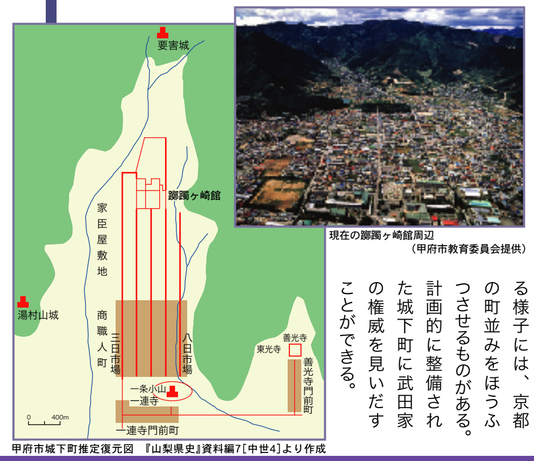
第二回目のテーマは「林」。
信玄の父信虎により、基礎が築かれた甲府は、駿府（静岡市）や小田原と並ぶ東国有数の都市に発展しました。また、商品の流通が活発化する過程で、度量衡の統一も進みました。人びとが生活していくうえで必要であった、生活基盤の整備について紹介します。

甲府城下 ～計画的な都市の建設～

県都甲府――。その基礎は、信玄の父武田信虎によって築かれた。

信虎は、永正十六年（一五一九）八月、躑躅ヶ崎館の建設に取りかかる。以後、天正九年（一五八一）、勝頼により新府城（韮崎市）に本拠が移されるまで、館は武田三代の本拠として、たびたび修築の手が加えられるとともに、その南側には城下町が整備されていった。

館に近接した北部には家臣の屋敷地が、南部には商職人町が、それぞれ展開していたという。南北にほぼ二町（約二百十八メートル）間隔に五本の基幹街路を設定し、これに東西の通りが直行する様子には、京都の町並みをほうふつさせるものがある。計画的に整備された城下町に武田家の権威を見いだすことができる。



甲府市城下町推定復元図　『山梨県史』資料編7［中世4］より作成

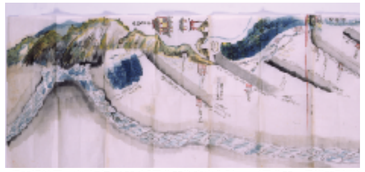
現在の躑躅ヶ崎館周辺
（甲府市教育委員会提供）

信玄堤 ～たび重なる水害の防止～

盆地を取り巻く山々。これらに源を発する諸河川は、盆地へ向けて一気に流れ下る。笛吹川の差出（山梨市）、近津（笛吹市）、釜無川の竜王（甲斐市）は、三大水防難所に数えられていた。

釜無川の左岸、竜王地内に築かれた堤防は「信玄堤」の名で知られている。築堤開始の時期は明確ではないが、「竜王河原宿」（現甲斐市竜王の前身の集落）の成立を物語る永禄三年（一五六〇）の武田家の朱印状の存在（保坂家文書）からも信玄の時代には一応の完成を見ていたことは疑いない。

釜無川・御勅使川の合流点付近には、六科・下条南割の両将棋頭、石積出、十六石などの遺構ものこる。「甲斐国志」以来の諸研究は、「信玄堤」をはじめとする一連の築造が、両川の流路の変更、及び川筋の固定を図る大規模な構想に基づく治水事業であったことを明らかにしている。


信玄堤絵図　文政7年（1824）「甲斐市指定文化財」　（甲斐市　保坂家所蔵）

上空からみた信玄堤

度量衡 ～公平な取引の確保～

公平な取引は、安定的な商業活動に欠かすことはできない。度量衡の統一が進んだのも、武田氏の時代という。武田氏のもとで秤の製作を担った守随氏は、武田氏の滅亡後、甲州を領有した徳川氏からも、秤製作の特権を認められたばかりか、江戸時代に入ると東国三十三ヶ国にその権益を広げていく。

一方、江戸時代、都留郡を除く山梨・八代・巨摩の三郡では、「甲州枡」と総称される枡が用いられた。京枡の三升が入る「大枡」（三升枡）をはじめ、大枡の四分の一の「はたご」、その半分の「なから」、さらにその半分の「小なから」の四種があった。その製造を担った府中工町の枡屋、伝之丞と銀次郎のもとには、武田時代の古文書が伝来しており（「甲斐国志」巻二ほか）、それゆえに甲州枡の起源についても、信玄に結びつけて説明されることが多い。銀次郎の子孫の小倉家には、今も武田家の朱印状のほか、枡の外面に捺された焼印が伝わっている。

甲州枡　（山梨県立博物館所蔵）

次回は、「火」をテーマにお送りします。